様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：８２６１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１７４６０

研究課題名（和文）終末期がん患者の家族介護者のレジリエンスと死別後の精神的健康への影響に関する研究

研究課題名（英文）The impact of resilience on psychological distress before and after bereavement in family caregivers of patients in palliative care units

研究代表者
清水　陽一（Shimizu, Yoichi）

国立研究開発法人国立国際医療研究センター・国立看護大学校・講師

研究者番号：５０７９１９３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：がん患者の家族介護者のレジリエンスが死別前後の抑うつの変化と死別後の複雑性悲嘆、及び、心的外傷後成長に影響するかを明らかにするために、緩和ケア病棟４施設において観察研究を行った。緩和ケア病棟に入院中のがん患者の家族介護者291名より自記式質問紙でデータを得た。その後、同施設において遺族調査を実施し、最終的に71名において死別前後のデータの連結が可能であった。家族介護者が中等度以上の抑うつ症状を有する割合は死別前で47.0%、死別後は15.2%であった。死別前のレジリエンスが死別前後の抑うつの改善に寄与していることが示唆された。一方で、死別後の複雑性悲嘆や心的外傷後成長に対する影響はなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
死別後に家族介護者の10%～20%が大うつ病や複雑性悲嘆のリスクが高い状態となることが知られている。死別に伴い医療機関にかかる機会が減ることで、抑うつの遷延や複雑性悲嘆のリスクが高い家族に対して支援につなげることができていないことが問題となっている。本研究によりレジリエンスが低い家族介護者は死別後にうつ症状が遷延する可能性が高いことが明らかになったため、死別前のレジリエンスの高さは支援が必要な家族介護者を死別前に同定する際に有用な情報であることが分かった。これにより支援が必要な家族介護者に適切な支援を届けることにつながる可能性がある。

研究成果の概要（英文）：We conducted the self-reported questionnaire survey for family caregivers of patients with terminally ill cancer in four palliative care wards to determine whether their pre-loss resilience affects changes in depression before and after bereavement, complexity grief, and posttraumatic growth after bereavement. Data were obtained from 291 family caregivers at the pre-loss time. Subsequently, we conducted a survey of bereaved family members in the same facilities. Among them, 71 were able to link their data before and after bereavement. The proportion of family caregivers with a high risk for major depressive disorder was 47.0% before bereavement and 15.2% after bereavement. Their pre-loss resilience was suggested to contribute to the improvement of depressive symptoms before and after bereavement. On the other hand, it was suggested that it had no effect on complex grieving or posttraumatic growth after bereavement.

研究分野：緩和ケア看護

キーワード：レジリエンス　抑うつ　緩和ケア　家族介護者　遺族　悲嘆

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

緩和ケアにおいては患者だけではなくその家族も重要な対象であり、家族の精神的健康の維持は重要なアウトカムである。日本では、緩和ケア病棟に入院中のがん患者の家族介護者を対象とした調査（幸田るみ子 他, 2016)や全国遺族調査（Aoyama　M., et al., 2018)において、介護中の家族や遺族の抑うつ症状が強いことが報告されている。しかし、死別前後における抑うつ症状の変化について明らかにした研究はない。そのため、本調査では、緩和ケア病棟に入院中のがん患者の家族介護者の死別前後の抑うつ症状の変化を明らかにする。

また、がんサバイバーや家族介護者を対象とした調査において、レジリエンス因子が精神的苦痛に対する緩衝材となって機能する可能性が指摘されている（Li, M & Wang, L. 2016)。そのため、終末期がん患者の家族介護者や死別後の遺族の精神的苦痛に対しても同様に機能する可能性がある。レジリエンスは、「逆境の中でもうまく適応し、成長することを可能にする個人的資質」と定義される（Connor, KM & Davidson, JR, 2003)。死別前後のコホート研究でレジリエンスの抑うつ症状の変化への影響は明らかにされていない。そのため、本研究の目的は、家族介護者が有するレジリエンス因子が患者の死にゆくプロセスや死別に伴うストレスによる精神的苦痛に対して防御因子として機能し、死別前後の抑うつ症状の変化をより改善する方向に作用しているかどうかを評価することである。

レジリエンスに似たような概念として心的外傷後成長がある。がん患者の家族においてレジリエンスが死別後の心的外傷後成長の個人としての強さに関連があったと報告している（Lee YJ, et al., 2016)。日本のがん患者の家族介護者において、レジリエンスと心的外傷後成長の関連の有無について明らかにする。

２．研究の目的

本研究の目的は、緩和ケア病棟に入院中のがん患者の家族介護者を対象に、１）死別前後の抑うつ症状の変化に対する死別前のレジリエンスの影響を明らかにすること、２）死別後の遺族アウトカム（複雑性悲嘆、心的外傷後成長、後悔、ケアの質評価）に対する死別前のレジリエンスの影響を明らかにすること、３）死別前後の家族介護者の抑うつ症状の変化を明らかにすること、である。

３．研究の方法

３．１．研究の対象者

緩和ケア病棟に入院中に実施したベースライン調査と死別後に実施した遺族調査で得られたデータのうち、両時点のデータがそろっている方を解析対象とした。

1）ベースライン調査

各緩和ケア病棟において調査開始日から連続的に入院された患者とその家族のうち、以下の選択基準を満たす方を抽出した。

・適格基準

1) 調査期間中に緩和ケア病棟に入院された進行・再発がん患者の家族であること

2) 患者が主たる家族介護者と認める者

・除外基準

1) 患者や家族介護者より拒否の意思表示があった場合

2) 患者と家族介護者が 19 歳以下の場合

3) 入院後 48 時間以内に退院された場合

4) 2 回以上調査期間中に入院し、一度調査対象となっている場合

5) 生活に支障があるほど重度の認知機能障がい、もしくは、抑うつ症状を家族介護者が有するため調査の協力が困難であると主治医が判断した場合

6) 家族介護者が日本語の理解が困難で、自記式質問紙への筆記による回答ができない場合

7) 予測余命が時間単位の場合

2）遺族調査

ベースライン調査の対象者のうち、一定の期間内に緩和ケア病棟で死亡退院された患者の家族介護者を対象とした。

３．２．調査方法

ベースライン調査と遺族調査の 2 時点において、自記式質問紙調査を行った。ベースライン調査における調査内容は、1）対象者背景、2）レジリエンス得点（Connor-Davidson Resilience Scale: CD-RISC)、3）うつ症状（Patient Health Questionnaire-9：PHQ-9）を測定した。遺族調査では、1）対象者背景、2）うつ症状（PHQ-9)、3）複雑性悲嘆のリスク（Brief Grief Questionnaire：BGQ)、4）心的外傷後成長（日本語版外傷後成長尺度拡張版：PTGI-X-J）を評価した。

４．研究成果

1）対象者とその背景

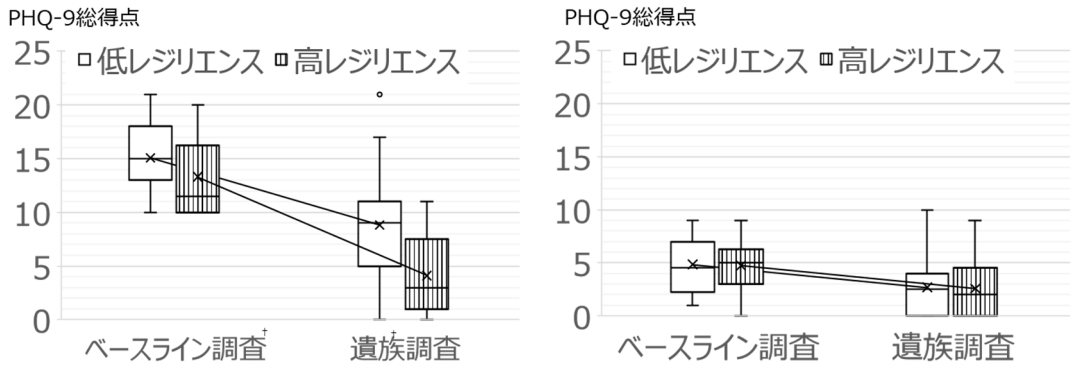
ベースライン調査では 317 名の家族介護者から同意を得て 291 名より返信を得た。遺族調査では 186 名に調査票を郵送し、108 名より同意を得て返信を得た。そのうち、両時点の調査で、対象者背景が一致している 71 名を解析対象者とした。遺族の年齢は平均(SD)＝63(13.2)歳で、女性が 55 名(77%)で続柄は配偶者が 44 名(62%)であった。

2）家族介護者の抑うつ症状の程度の死別前後での変化

ベースライン調査での PHQ-9 の得点は平均(SD)=9.2(5.7)で、大うつ病のリスクが高い中等度(PHQ-9 が 10 点)以上の抑うつ症状を有する方が 47%を占めた。一方で、遺族調査では PHQ-9 の得点は平均(SD)=4.4(4.45)で、中等度以上の抑うつ症状を有する方が 15.2%であった。死別前後の抑うつ症状の程度の変化のパターンとしては、安定型が 54.1%、改善型が 29.5%、持続型が 14.8%、悪化型が 1.6%であった。

3）死別前のレジリエンスと抑うつの変化への影響

家族介護者のレジリエンス（CD-RISC 得点)は平均（SD)=58.7（16.5）であった。死別前に中等度以上の抑うつ症状を有していた家族介護者は、死別後に PHQ-9 得点が平均(SD):-7.4(5.01)の改善がみられ、レジリエンス得点によって改善の程度に違いがあった。レジリエンスが高い(58 点以上)場合は平均(SD):-8.4(4.10)点の改善がみられたのに対し、レジリエンスが低い(57 点以下)と平均(SD):-6.7(5.76)点の改善であった(図 1a)。一方で、死別前の抑うつ症状の程度が軽度以下の家族介護者については PHQ-9 得点の変化は平均(SD)で-2.1(3.15)点で、レジリエンスが高い場合は平均(SD):-2.2(3.39)点、レジリエンスが低いと平均(SD):-2.2(2.86)点で、レジリエンス得点による差はなかった(図 1b)。



a.死別前の抑うつ症状が中等度以上だった家族介護者　b.死別前の抑うつ症状が軽度以下だった家族介護者

図１：死別前のレジリエンスの高さと死別前後の抑うつ症状の程度の変化

レジリエンスの抑うつ症状の程度の変化への影響を評価するため、死別後の PHQ-9 得点を被説明変数、死別前の PHQ-9 得点とレジリエンス得点、交互作用項を説明変数として回帰分析を行い、死別前の PHQ-9 得点(β=1.2，p<0.01)、レジリエンス得点(β=0.09，p=0.62)、交互作用項(β=-0.72，p=0.046)であった(表 1)。

表 1：死別後の PHQ-9 得点に対する死別前の PHQ-9 とレジリエンス、交互作用項の影響

	β	SE	β	t	p	
切片	-0.68	3.500	-	-0.19	0.85	R^2:0.42
死別前のPHQ-9総得点	1.00	0.307	1.24	3.26	<.01	
CD-RISC（連続量）	0.03	0.053	0.09	0.49	0.63	調整済み R^2:0.39
交互作用	-0.01	0.005	-0.72	-2.04	<.05	

3）死別前のレジリエンスと複雑性悲嘆や死別後の心的外傷後成長への影響

複雑性悲嘆のリスク(BGQ 得点)は平均(SD)=5.3(2.0)で、複雑性悲嘆のリスクが高いとされる 8 点以上の遺族が 16.2%であった。一方で、心的外傷後成長(PTGI-X-J 得点)については、総得点（125 点満点）で平均(SD)=47.2(28.7)、各下位尺度は「他者との関係(35 点)」で平均(SD)=15.1(8.8)、「新たな可能性(25 点)」で平均(SD)=8.7(7.0)、「人間としての強さ(20 点)」で平均(SD)=7.7(5.0)、「精神的変容・スピリチュアリティ(30 点)」で平均(SD)=11.3(7.8)、「人生に対する感謝(15 点)」で平均(SD)=8.5(4.2)であった。死別前の家族介護者のレジリエンスの死別後の複雑性悲嘆、心的外傷後成長への影響は確認されなかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Shimizu Yoichi、Hayashi Akitoshi、Maeda Isseki、Miura Tomofumi、Inoue Akira、Takano Mayuko、Aoyama Maho、Matsuoka Yutaka J.、Morita Tatsuya、Kizawa Yoshiyuki、Tsuneto Satoru、Shima Yasuo、Masukawa Kento、Miyashita Mitsunori	４．巻 31
２．論文標題 Changes in depressive symptoms among family caregivers of patients with cancer after bereavement and their association with resilience: A prospective cohort study	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Psycho-Oncology	６．最初と最後の頁 86～97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/pon.5783	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清水陽一	４．巻 27
２．論文標題 終末期がん患者の家族介護者のレジリエンスと死別後の精神的健康への影響に関する研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 がん看護	６．最初と最後の頁 410～412
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 清水陽一，前田一石，林章敏，高野真優子，三浦智史，井上彰，升川研人，木澤義之，森田達也，志真泰夫，恒藤暁，宮下光令
２．発表標題 がん患者の家族介護者のレジリエンスと死別後の抑うつとの関連(J-HOPE4付帯研究)
３．学会等名 緩和・支持・心のケア合同学術大会2020
４．発表年 2020年

１．発表者名 清水陽一、宮下光令、林章敏、高野真優子、前田一石、松本禎久、井上彰、升川研人
２．発表標題 終末期がん患者の家族介護者の精神的健康とレジリエンスの関係に関する研究
３．学会等名 第24回日本緩和医療学会学術大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宮下　光令 (Miyashita Mistusnori)		
研究協力者	林　章敏 (Hayshi Akitoshi)		
研究協力者	前田　一石 (Maeda Isseki)		
研究協力者	三浦　智史 (Miura Tomofumi)		
研究協力者	井上　彰 (Inoue Akira)		
研究協力者	森田　達也 (Morita Tatsuya)		
研究協力者	木澤　義之 (Kizawa Yoshiyuki)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	恒藤　暁 (Tsuneto Satoru)		
研究協力者	志真　泰夫 (Shima Yasuo)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関